

◆ 奨励賞 ◆

成長の三年間

中原中学校三年

飯田さくら

私が剣道部に入部したのは、先輩方がとても優しかったからだった。部活動体験のときに、何度も声をかけてくださいり、先輩方と一緒に剣道がしたいと思つた。

入部して初めて迎えた夏。私は県大会の団体戦に出場させてもらえることになった。大きな会場、張り詰めた空気、鳴り響く打突の音。立つているだけで緊張した。

試合後、出場記念のバッジを貰つた。すごく嬉しくて、私はこれを三年分集めることを目標にした。

県大会が終わると、三年生の先輩方が引退してしまつた。さらに夏の稽古は想像以上に厳しかつた。息が苦しくて、うまく動けずに注意されて、悔しくて泣いたことは何度もあつた。あのバッジを集めることだと自分に言い聞かせて、なんとか稽古を続けた。

二年生になると、春の県大会に出場することができた。夏も勝つことができれば、順調に目標に進んでいけるはずだつた。

しかしその夏、県大会に出場することはできなかつた。私は目の前が真つ暗になつた。あれだけ努力したのに、目標が叶わなくなつたからだ。それでも厳しい稽古は続き、気持ちはどんどん沈んでいった。もう辞めたいと思つたのは、一度や二度ではなかつた。

そんな私を救つてくれたのは先生や先輩、仲間たちだつた。私の話を真剣に聞いて、励ましてくださつた先生と先輩。暑さで倒れそうになり、稽古を抜けてしまつたときに水筒を渡してくれた仲間たち。今更だが、その存在に助けられていることに気がついた。

三年生になつたとき、私はバッジのために頑張ろうなんて思つていなかつた。ただ、剣道が好きになつた。

「今日も疲れたね。」

という稽古後恒例の会話、試合前の緊張感、仲間と組む円陣、一本取つたときの達成感、すべてが大切な時間だつた。

そして迎えた最後の夏。私たちは県大会に出場することができた。目標だつた全年出場は叶わなかつたけれど、それよりもずっと大切なものを手に入れることができた気がした。それはきっと、諦めずに努力した時間と成果、支えてくれた人たちとの絆。そして、辞めなかつた自分への自信だと思う。

今、あのときの私に伝えたい。

「続けた先には、涙も悔しさも超えた、バッジのように輝く景色が待つてゐるよ。」と。